

ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (VI)

—— 歌唱教材「きよしこの夜」からの考察 ——

Piano Accompaniment: Techniques and Instruction (VI)

— Teaching Materials for Singing Practice as Exemplified by 「Stille Nacht, heilige Nacht」 —

寺 蘭 玲 子

Reiko TERAZONO

1. はじめに

音楽教育の現場において、特に歌唱指導の場合、ピアノ伴奏が重要な役割を担っていることは、これまでピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (I) (II) (III) (IV) (V) でも述べてきた。

本短大の場合もこれまで述べてきたように、わずか2年間で修得した技術をもって現場に臨んでいく学生達が不安をもっていることを杞憂し、如何に力をつけさせ自信をもたせていくかということとを常に考慮に入れながら指導の任にあたりたいと考えつづけている。

本短大での著者の担当科目の中に、器楽Ⅰ・Ⅱ、表現Ⅲが含まれている。ピアノ伴奏の指導と実際をも取り入れながらの講義・演習である。この10数年来、児童教育学科（初等教育学専攻および幼児教育学専攻）の1年生を対象に、入学時にピアノのアンケート調査を実施してきているが、毎年約3割程度の学生が初心者である。残りの約7割程度は、入学の為にと短期間指導を受けてきた学生、幼児期または小学校・中学校時代にピアノを習ったという学生、或いはピアノ以外に吹奏楽部などに籍を置き他の楽器を演奏した経験のある学生や、合唱部で音楽に親しんでいた学生等と様々である。学生達が一週間に一回受けるピアノの個人指導の結果は、受講者全員の進度をピアノ進度表に毎回記録し、それぞれの成長の過程を見ているわけであるが、当然学生達の個々の能力に応じた指導が要求されるわけである。

本短大で歌唱の教材として使用しているものは、新小学校学習指導要領に基づく歌唱共通教材を中心の小学校の教材、本県鹿児島私立幼稚園協会編の「うたとあそび」では幼稚園・保育園の現場で使用する教材が中心となっているが、筆者の選択で、毎回時代の流れに則した歌唱教材や次世代へと歌い継いでいきたい日本の童謡唱歌、時には手話をまじえての教材も加えている。

今夏も昨年に引き続き、鹿児島県総合教育センターの依頼を受け、中学校、高等学校、盲・聾・養護学校教員の実技講座を担当させていただいた。同センターが「教職員の実践的指導力の向上」をはかることを目標に、地区、学校での実践・研究を支援する講座である。県やホールの協力・配慮をいただき、2004年の今夏25周年を迎えた霧島国際音楽祭が開催されているみやまコンセールを研修会場に、また世界超一流の演奏家達の演奏や指導を間近に、何より最高のホール・音響の中で

の充実した研修ができたことは、それぞれの受講者が学校現場にまた新しい音楽の風を持ちかえる良い機会であったと考える。本短大の卒業生達にも同センターの短期研修講座で再会することも多いが、学生達にも同様に本物に触れる機会を是非多く作ってもらいたいと願っている。

筆者は、教材の資料収集の為に可能な限り国内外の楽曲に関する地を訪れている。作詞者や作曲者、また楽曲のできた背景についても筆者なりに感じ取るためでもある。子や孫の世代へと歌い継いでほしいと願う童謡唱歌の中の風景や暮らしの情景が消えゆく時代にあって、せめて歌の中には残し、音楽活動を通して伝えていきたいと願っている所以である。

今回は「うたとあそび」の季節のうた「12月のうた」に登場する「きよしこの夜」を教材として取り上げ、奏法や楽曲及び背景などについても研究するべくオーストリアのザルツブルグに出向き資料収集を行った。

これまでのピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (I) (II) (III) (IV) (V) では、旋律を含む和音伴奏の奏法やペダル奏法を中心の「赤とんぼ」、左手分散和音の奏法や無理なく自然に音を出せるタッチの研究の「牧場の朝」、アルペジオ奏法の「早春賦」、間の取り方や簡易伴奏の工夫などを考慮にいれながらの「待ちぼうけ」「この道」、より芸術的に美しく演奏するための「花」「菩提樹」と取り組んできたが、今回は学生達が愛唱している「うたとあそび」の中の「きよしこの夜」の伴奏楽譜も検討しながら、音のバランスや音色をも考慮にいれ楽曲とその背景について研究していきたいと考える。

2. 楽曲「きよしこの夜」について

「Stille Nacht, heilige Nacht」の懐かしい旋律が、たった一本のギターの伴奏で、雪を被った小さな礼拝堂とその前のモミの木を囲んだおよそ8,000人の人々によって、色々な国の言葉で歌われるという感動に包まれたのは、1987年12月24日のことであった。

度々の大洪水にみまわれたという村のこの場所に、1924年8月24日に“Stille - Nacht - Gedächtnis - Kapelle” (きよしこの夜記念堂) が起工され、完成して落成記念式典が行われたのが1937年8月15日のことである。奇しくも50周年記念の年に訪ねる幸運に恵まれたというわけであった。ところは、モーツァルトが生まれた音楽の都・ザルツブルグから北へローカル鉄道で約30分のオーベルンドルフ村。午後5時から始まった Stille - Nacht - Gedenkfeier の終わりに歌われたのが、この「Stille Nacht, heilige Nacht」である。筆者自身も凍るような寒さの中ではあったが、ドイツ語やフランス語・イタリア語・英語などの歌詞を耳にしながら「きよし～このよる～」と日本語で歌い至福の時を得たのは言うまでもない。おりしもピアノ伴奏の研究の為にオーストリア・ウィーン国立音楽大学に二度目の留学中のことであった。その後、機会があるごとにザルツァッハ川のほとりのこの村を訪ねた。そして、この楽曲を学生達が歌ったり弾いたりする時期には、講義の中でスライドや Dr. Max Gehmacher の著書の中から由来などを紹介してきた。

2004年の今年、9月中旬にオーベルンドルフ村をまた訪れる機会に恵まれた。ウィーン西駅を早朝出発、E C 662号・Tiroler Landestheater (ティローラー・ランデステアター) に乗りこみ2時間48

分でザルツブルグ中央駅に到着。中央駅の Lokalbahnhof (地下駅) から出る Lamprechtshausen (ランプレヒトハウゼン) 行きのローカル線に乗り換え35分で目的地のオーベルンドルフ村に到着。車窓からはのどかな田園風景や森が広がり、紺の制服に赤いネクタイ姿の長身の女性車掌が乗客と親しく会話を交わしながら車内を歩いていく。各駅停車でのあつという間の35分である。Oberndorf 駅とは名ばかりの、駅名を書いた立て札と待ち合い用にと4～5人が座れそうな長椅子と列車の時刻表が貼ってあるだけの小さな小さな駅である。駅前の衣料品店で道を確認して、新しい St. Nicola-Kirche (聖ニコラ教会) を背に、ザルツァッハ川に向かって歩いて行くと、川岸の向こうはドイツの町 Laufen (ラウフェン) である。1901年～1903年にバイエルン王国とオーストリア帝国との共同事業により架けられたというザルツァッハ橋を渡りきると15世紀に建てられた旧市庁舎があった。川が国境になるわけだ。このように国境が身近にあるということさえも驚きだ。再び橋を渡ってオーストリア・オーベルンドルフ側に戻る。ザルツァッハ川に沿って歩いて行くと右手に幼稚園、園庭からかわるがわる垣根越しに園児たちが声をかけてくれる。河原では先生と子どもたちが川遊びのようである。丁度川を隔てて向こう岸のラウフェン・シュティフト教会から時を告げる鐘の音が響いてきた。

オーベルンドルフは対岸のラウフェンと共にザルツブルグ侯爵領であったが、ナポレオン敗退後のウィーン会議で分割され、川の向こうはバヴァリア王国になった為、それまでこの川で岩塩を運んで生計を立てていた人々は、ラウフェン司教区から分離して聖ニコラ教会へお参りするようになったそうである。

1818年のクリスマスを目前にした12月23日のことだった。聖ニコラ教会の若い副司祭ヨーゼフ・モーアは困り果てていた。クリスマスというのに大事なオルガンが壊れて鳴らないのである。オルガンの修理はチロルの修理業者に頼んでいた為に、雪深いこの地では春の雪解けを待たなければならない。モーアは雪の中を8キロほど離れた隣村の Arnsdorf (アルンスドルフ) に住んでいるフランツ・グルーバーを訪ねて行く。グルーバーは当時アルンスドルフの学校の先生をつとめながら、聖ニコラ教会のオルガニストも兼ねていたのである。二人は思案に暮れながら考え込んでいたが、モーアが聖書のルカによる福音書に基づく詩を書き、グルーバーにギター伴奏で二重唱のできる歌の作曲を依頼した。著者の持ちかえった複製版の楽譜には次のように説明が書きこまれてある。

Die Anregung zur Entstehung des Liedes gab Joseph Mohr, als er kurz vor dem Weihnachtsfeste 1818 Franz Xaver Gruber den Vorschlag machte, gemeinsam etwas für die Heilige Nacht zu verfassen, was auch bald darauf geschah. Mohr verfaßte den Text und überreichte ihn am 24. Dezember seinem Freund Gruber mit der Bitte, ihn passend für zwei Solostimmen und Chor mit Gitarre begleitung zu vertonen. Gruber übergab noch am gleichen Abend seine einfache Komposition dem musikalisch wohlgebildeten Auftraggeber. Da sie Mohr gefiel, wurde das kleine Lied im engsten Zusammenwirken der beiden Schöpfer in der St. - Nikolaus - Kirche in Oberndorf bei Salzburg während der Christmette uraufgeführt und fand allgemein Beifall. Mohr sang Tenor und begleitete mit der Gitarre, Gruber Baß, der

Kirchenchor die Wiederholung der beiden Shlußverse.

モーアがテノール（高音部）を歌い、グルーバーがギターで伴奏しながらバス（低音部）を歌う。そして二人の二重唱のあとを聖歌隊が繰り返し続いたと記されている。ここに世界中の人々に愛唱されるようになった「きよしこの夜」が誕生したというわけだ。とは言うものの当人のグルーバーもモーアもこれほどまでに世界中で歌われるようになるとは思ったであろうか。

そもそもこの歌が世に知られるようになったのは、讃美歌としてではなく、TirolerVolkslied（チロルの民謡）としてらしい。インスブルック近くのアルプスの渓谷 Zillertal（ツィラタール）の Fügen（フューゲン村）のオルガン製造者だった Karl・Mauracher（カール・マウラッヒヤー）が、1824年から1825年にかけてオーベルンドルフを訪ね、モーアの教会にオルガンの修理に行っている。この時「きよしこの夜」を知り故郷に持ちかえったところからこの歌が広まっていったようである。次に紹介する二組の Sängerfamilie（歌い手一家）の功績は大である。

Zillertal の靴職人 Strasser（シュトラッサー）は毎年彼の製品を携えてドイツの年の市やミサに通っていた。彼の住居は今も残されている。元来卓越した歌唱力を持つ“シュトラッサーファミリー”は、1832年12月15日 Leipzig（ライプツィヒ）でコンサートを行っている。他の歌に加えて、この時も「きよしこの夜」を歌ったと“Leipziger Tageblatt”に記されている。

もう一組の Sängerfamilie（歌い手一家）は、やはり Zillertal の Rainer（ライナー）一家である。男兄弟4人と女1人から成る“ライナーシンガーズ”として、1822年には皇帝フランツ I 世の Fügen 城や皇帝アレクサンダーの城で演奏している。その後ドイツ・イギリス・ソ連などを巡業しているようである。1839年には「きよしこの夜」を携えてニューヨークで歌うほどの超売れっ子になったそうである。当時のチロル民謡集に収められた「きよしこの夜」には作詞・作曲者の名前はなく、グルーバーが名乗り出たのは1854年だったということである。我が国の文部省唱歌の作詞者・作曲者が実に最近になって紹介されたことを思い出さずにはいられない。

「きよしこの夜」が誕生して、昨年2003年12月24日で185周年を迎えた。著者が以前ザルツブルグの Bibliothek des städtischen Museums Salzburg やオーベルンドルフで購入したオリジナルの複写には見られなかった、今回の185周年を迎えた記念スタンプや記念切手貼付の楽譜をここに紹介させて頂く。St. Nikolaus Kirche の絵に加え、「きよしこの夜」の成り立ちやグルーバーやモーアの説明などが記されている。Sonderdruck der Firma A. Stöttner Ges. m.b. H, A-5110 Oberndorf bei Salzburg の記念印刷であることも加えておく。

[illegible]

Chiesa marinaresca St. Nicola a Oberndorf presso Salisburgo, menzionata in documenti attorno al 1170

Gli altari, con grandiose pitture di Christian Wink (altare maggiore e altare laterale sud) rispettivamente del 1775 e del 1776 e di Franz Ignaz Oschle (altare laterale nord) del 1775 e statue di Johann Giner del 1829, della vecchia chiesa di S. Niccolò, demolita nel 1906, in cui fu eseguito per la prima volta «Santo Natale» nel 1818, furono dinuovo innalzati nella nuova chiesa parrocchiale.

- ① Entrata principale a sud
- ② Torre
- ③ Coro canoro e organo
- ④ Altare laterale nord (a sinistra) (S. Ruperto)
- ⑤ Altare laterale sud (a destra) (S. Massimiliano)
- ⑥ + ⑦ Scale ai matronei da entrambi i lati
- ⑧ Presbiterio con l'altare maggiore (S. Niccolò)
- ⑨ Ubicazione della Cappella di Memoria, che fu qui innalzata in onore di entrambi gli autori del canto e inaugurata il 15 agosto 1937.



Joseph Mohr operò qui dal 1817 al 1819 come giovane prete ausiliare.

Franz Xaver Gruber svolse il servizio organista dal 1816 al 1829 nella chiesa di S. Niccolò.

«Santo Natale»

L'impulso all'origine del canto lo diede Joseph Mohr quando, poco prima della festa di Natale nel 1818, propose a Franz Xaver Gruber di comporre qualcosa insieme per la Santa Notte, cosa che è accaduta poco dopo. Mohr compose il testo e lo consegnò il 24 dicembre al suo amico Gruber pregandolo di musicarlo adeguatamente per due voci soliste di un coro, con accompagnamento di chitarra.

Gruber consegnò la sera stessa la sua semplice composizione al committente musicalmente ben colto Poisch: nacque a Mohr, il piccolo canto fu eseguito in stretto cooperazione di entrambi gli autori nella Chiesa di S. Niccolò a Oberndorf presso Salisburgo durante la Messa di Mezzanotte e riscontrò un applauso generale.

Mohr cantò da tenore e accompagnò con la chitarra; Gruber da basso, il coro della Mezzanotte il ritornello di entrambi gli ultimi versi.

Tiratura speciale della Dina A. Stöckner Ges. m. H. A. 5-110 Oberndorf presso Salisburgo (Austria)

Kirchenlied
 auf die
heilige Christnacht
 für
 Sopran und Alt
 ...
stiller Orgelbegleitung

Text von Herrn Gos. Mohr Coadjutor
comp. von Franz Gruber Schullehrer
in Arnsdorf in 2 Organist in St. Nicola
wöster. Laufen
1818

Canto religioso
sulla
Santa Notte di Natale
per
soprano e contralto
e
silenzioso accompagnamento.

Testo del sig. Josef Mohr, coadiutore
composto da Franz Gruber, maestro
ad Arnsdorf e organista a St. Nic.
oesterr. Laufen.

「きよしこの夜」の歌詞は大抵の場合 3 番まで紹介されているが、本来はドイツ語の歌詞で 6 番までである。筆者の持ちかえったオーベルンドルフの楽譜には、ドイツ語に加え、英語・フランス語・ハンガリー語の歌詞も紹介してあるが、下記の歌詞が原譜に書きこまれているのでここに紹介しておきたい。

“Stille Nacht, Heilige Nacht”

1. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Alles schläft, einsam wacht
Nur das traute heilige Paar. Holder Knab im lockigten Haar,
Schlafe in himmlischer Ruh ! Schlafe in himmlischer Ruh !
2. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Gottes Sohn, o wie lacht
Lieb' aus deinem göttlichen Mund, Da uns schlägt die rettende Stund
Jesus in deiner Geburt ! Jesus in deiner Geburt !
3. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Die der Welt Heil gebracht.
Aus des Himmels goldenen Höhn Uns der Gnaden Fülle läßt sehn:
Jesum in Menschengestalt, Jesum in Menschengestalt.
4. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Wo sich heut alle Macht
Väterlicher Liebe ergoß Und als Bruder huldvoll umschloß
Jesus die Völker der Welt, Jesus die Völker der Welt.
5. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Lange schon uns bedacht,
Als der Herr vom Grimme befreit in der Väter urgrauer Zeit
Aller Welt Schonung verhiess, Aller Welt Schonung verhiess.
6. Stille Nacht ! Heilige Nacht ! Hirten erst kundgemacht
durch der Engel Alleluja, Tönt es laut bei Ferne und Nah:
Jesus der Retter ist da ! Jesus der Retter ist da !

我が国に「きよしこの夜」が初めて登場したのは明治42年の「讃美歌第二編」である。

昭和 6 年版の「讃美歌」に収められた由木康牧師の名訳が現在も一般的に使われている。昭和29年（1954年）に由木牧師が一部の手直しをしておられるようである。

今回の伴奏楽譜は讃美歌第二編244を参考に、本短大で表現Ⅲの講義に使用している鹿児島私立幼稚園協会編「うたとあそび」の中の「きよしこの夜」で奏法の研究をしていきたいと考える。

基本的な和声の勉強をするには讃美歌が最もふさわしいと著者自身は感じている。文部省唱歌として愛唱されつづけてきた「故郷」や「おぼろ月夜」等の作曲者が岡野貞一として知られるようになったのは最近のことであるが、岡野貞一の基礎になっているのがオルガンで弾いた讃美歌であったといわれるのもなるほどとうなずける。著者が指導を仰いだウィーン国立音楽大学の恩師、ロベルト・シヨルム教授をはじめチェルハ教授、ヌスグラーバー教授等が現代作曲家であった為に、特に20世紀の現代音楽にふれ又演奏する機会が増えたこともあって、最も基本的な和声の讃美歌には美しさと安らぎを感じるのである。次は、讃美歌第二編244の DESCANT (デスカント) つきの楽譜である。

244 きよしこのよる

Stille Nacht, heilige Nacht!
18 : Joseph Mohr, 1818

STILLE NACHT
Franz Gruber, 1818
(デスカント) Harry Robert Wilson

DESCANT *

♩=96 きよし このよる ほしは ひかり

すくいーの みーこは まぶねーの なーかに

ねむりーた めー いーとやーすくーアーン

* このデスカントは母音でうたう

楽譜2 「きよしこの夜」(讃美歌第二編244番)

ところで、「きよしこの夜」が戦後我が国で急速に広まったといわれるが、その原因は米軍の占領時代のクリスマスブームによるもののようである。朝鮮戦争の特需景気で復興し始めた日本に、この歌が豊かな米国のライフスタイルの象徴として映ったのだらうと、1989年(平成元年)南日本新聞掲載の「世界愛唱歌の旅」の中で共同通信の村田久夫氏が述べている。

2004年10月2日・3日に熊本で開催された平成16年度全国大学音楽教育学会九州地区学会・第20回研究学会での「平成16年度全国大学音楽教育学会九州地区学会所属各大学短大子どもの歌調査結果」によると「きよしこの夜」は13大学短大の10大学短大が使用、採用率は77%とよく歌われているようである。

さて、久しぶりに訪ねた「きよしこの夜礼拝堂」は、両脇の二本のもみの木も、周囲のもみの木や芝もきれいに手入れが行き届いていた。早速礼拝堂（記念堂）の中に足を運ぶと、正面の祭壇には木製のキリスト降誕像、左右のステンドグラスには作詞者のヨーゼフ・モーアとオーベルンドルフの教会、作曲者のフランツ・グルーバーとアルンスドルフが画かれ、1818年12月24日にこの曲が作られたと書かれてある。僅かばかりの長椅子と赤いローソクが灯された燭台のある簡素な小さな礼拝堂はステンドグラスを通しての陽光が美しかった。礼拝堂の向かい側にはザルツァッハ川を背に、改装された白壁の Heimatmuseum Oberndorf（オーベルンドルフ郷土博物館）が建っている。

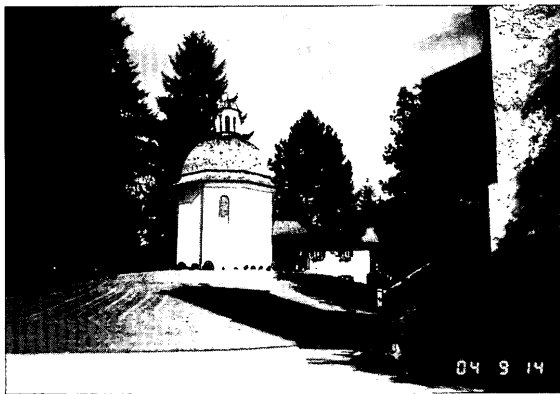


写真1 「きよしこの夜礼拝堂（記念堂）」



写真2 「1987年の50周年切手」

「きよしこの夜」の歌が現在は300以上の異なる言語（外国語や方言）に翻訳されているとのことであるが、1909年オーベルンドルフに生まれた哲学者で経済学者の Leopold Kohr（レオポルド・コール）氏の力によるものも多いといわれる。1950年代から1994年まで多くの言語訳をつとめたことが記されている。郷土博物館には今回購入した資料や・楽譜・絵葉書などに加え、以前は無かった「きよしこの夜グッズ」が並べられていて時の流れを感じた。かつて大洪水にみまわれた「きよしこの夜」区のこの場所に1540年に建てられた給水の為の貯水塔が、礼拝堂とともにオーベルンドルフの目じるしともなっている。礼拝堂入り口正面には、Galerie Helmut Junger（ギャラリー）も新築され、庭にはたわわに実をつけた洋梨の木やニワトコが植えられていた。シュタイヤーマルクから自転車でオーベルンドルフまで来たという60代くらいの元気なドイツ人女性4人グループとも声を交わすことだった。午前中で小学校の授業の終わった村の子供が、横長のランドセルを背に礼拝堂の前庭を横切って行った。再びザルツァッハ川に沿って村を後にした。2004年のこの冬、12月24日もこの礼拝堂の周囲が「きよしこの夜」の歌声に包まれ、ザルツァッハ川の対岸、ドイツ・ラウフェンの町にも響き渡るのであろう。

3. ヨーゼフ・モーアとフランツ・グルーバーについて

作詞者 Josef・Mohr（ヨーゼフ・モーア）と作曲者 Franz・Gruber（フランツ・グルーバー）の足跡を訪ね、Hallein bei Salzburg（ハライン村）のグルーバーの墓と Wagrain（ワグライン村）のモー

アの墓に参ったのは1987年12月25日のことだった。雪に覆われた二人の墓にはそれぞれ赤い小さなローソクがともされ花輪が飾られてあった。グルーバーがかつて聖歌隊長兼オルガニストとして働いた当時の Pfarrkirche (聖堂区教会) の真向かいにある住居の入り口には、グルーバーの顔のリリーフと大理石に刻まれた記念の碑が、入り口右横にはグルーバーの墓があった。

ワグライン村のモーアの墓は今でも鮮明に思い出せる。雪を被った十字架のてっぺんに星、ペンを握っているモーアの絵を囲んで彼がその作詞者であると書かれた文字、アラベスクの中に天使達が描かれていて、陽に照らされキラキラと眩しかった。簡素な墓であるにもかかわらず、寒さも忘れてひたすら感動したこの時が、筆者にとっての「きよしこの夜」の歌との出会いであったような気がする。

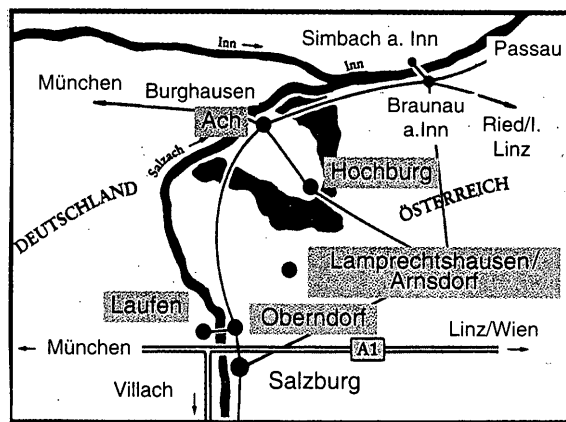


図1 オーベルンドルフ周辺の地図

ヨーゼフ・モーアは、1792年12月11日、Salzburger Felsengasse (ザルツブルグ、フェルゼン小路) Nr. 31に誕生している。生粋のザルツブルグっ子である。幼児期から少年時代をおくったその家は現在は Steingasse と名前が変わっているが、建物の2階(日本流で言う3階)である。彼は二つの天賦の才を持って生まれてきたようである。一つは宗教人としての、もう一つは深く音楽を愛する真の音楽家としての才能である。子ども時代には、ザルツブルグ・ペーター教会や大学教会の少年合唱隊や聖歌隊でも歌っていたようである。Oberösterreichにある有名なクレムス神学大学が、音楽の才に恵まれたモーアに、同大学の音楽関係の務めをすることで食費も授業料も免除したと書かれてある。

彼の最後の修業はザルツブルグの大司教のセミナーであった。1815年8月21日、晴れて神聖なる司祭の役職を担っていくことになるのである。その後いろいろな教会へ赴任していくことになる。

ザルツァッハ川ほとりのオーベルンドルフ村で副司祭として働くことになったのが1817年から1819年にかけてのことである。この間にグルーバーとの運命的とも言える出会いがあって、「きよしこの夜」の歌が誕生していくわけである。その後初めて司祭として赴くのが、Hintersee (ヒンターゼー) 教会、その8年後 Pongau の魅力ある聖なる村ワグラインに移り住むことになるのである。この地で、モーアは1848年12月4日に56年のその生涯を終えている。その墓は、慎み深い人柄が村人に慕われた司祭モーアにふさわしく、先にも述べたように、地元の鍛冶職人の手になる簡素な十

字架に装飾を施したものである。

フランツ・グルーバーは、1787年11月25日、Hochburg（ホッホブルグ）で貧しい亜麻布を織る職工の第3番目の息子として誕生したと記されている。生家のあった Steinpointsolde（シュタインポイントシェルデ）はすでに訪ねるべくもないが、記念牌だけは残されている。家の所有者の話によると1927年までは旧家賃で住人がいたと言うことである。しかし Ach と姉妹盟約を結んだ後グルーバー学校の中には可愛い模型だけが残されている。グルーバーも音楽をこよなく愛し、又その音楽的才能に秀でた子どもであった。父親の目を盗んでヴァイオリンやオルガンの練習にも励んでいたようであるが、やがて父親の知るところとなる。結局許しをもらうことには為るのであるが、フランツは成るべくして教師の道を歩むことになる。1807年、20才のグルーバーは、Arnsdorf（アルンスドルフ村）に最初の職を得ることになる。アルンスドルフは、オーベルンドルフから156号線を北上すると右側にある小さな村である。彼はやがて、この地で学校の校長と教会のオルガン奏者になっていくのである。1816年からは、オーベルンドルフの聖ニコラ教会のオルガン奏者も兼務することになる。

1906年から1913年にかけてこの教会は全面取り壊しになったが、現在の聖ニコラ教会には、司祭モアと作曲者グルーバーの二人のブロンズ像を見ることができる。アルンスドルフには古い学校がある。グルーバーとその家族が1807年から1829年までの21年間住んで働いた学校である。この学校の階上にグルーバー一家は生活していた。オーストリアで最も古い校舎であるが、今もなお授業がおこなわれている。グルーバーが授業していた当時のままの教室を見ることができたことこの上もない感激だった。この学校の最上階が記念館 “Franz - Xaver - Gruber” Museum になっていて、グルーバーの原譜やギターなどを見ることができた。記念館横にある教会 Wallfahrtskirche “Maria im Mosl” には嘗てグルーバーが弾いたであろうオルガンにも出会えた。

アルンスドルフから Berndorf（ベルンドルフ村）に転勤して6年間を過ごした後、彼は1835年 Hallein（ハライン）の Stadtpfarr-Cohrregent に就任、町の聖歌隊の指導者として音楽の本領を発揮することになっていくのである。グルーバーは1863年6月7日に76年のその生涯を終えるまでハラインに住んだ。

ハラインの Heimatmuseum（郷土博物館）では、彼の手書きの楽譜の原譜や、ピアノやギター、Gruberstubchen（グルーバーの小部屋）に思い出の品々を見ることができた。Keltenmuseum には1846年 Sebastian Stief によって描かれた Franz Xaver Gruber（グルーバー）の肖像画が飾られてある。また Salzburg 州 Hintersee 聖堂区教会には Vikar（司祭）Josef Mohr（モア）の肖像画を見ることができる。

「きよしこの夜」の最後の節のメロディーが「Leise rieselt der Schnee」に似通っていると1909年 Eduard Ebel の説にも登場したようであるが、定かではない。勿論グルーバー自身も知らぬこと、終結部の旋律が故意に模倣されたものでないことは明白であり、基礎的な和声の動きの中にあっては、むしろ似通った旋律が出てきて当然と著者は考える。

以上、楽曲「きよしこの夜」について、著者自身が実際訪ねたゆかりの町や村、教会について、

また作曲者グルーバーと作詞者モーアについて、かの地で得た資料をもとに述べてきた。次に伴奏とその奏法について述べていくことにする。

4. 「きよしこの夜」の伴奏と奏法について

楽譜1で紹介した楽譜は、1855年頃作曲者自身による手書きの複写であるが、オリジナルの原譜はザルツブルグの博物館 Carolino Augusteum に保管されている。1987年オーベルンドルフで「きよしこの夜」を感動の中で歌って以来、持ちかえった「Stille Nacht, heilige Nacht」の楽譜の複写は金縁の額の中に、常に著者の音楽の部屋で愛用のピアノやチェンバロとともにある。

原曲は、二長調、8分の6拍子である。速度は Moderato (モデラート) と記されている。Sopran und Alto Solo とあり、歌はソプラノとアルとの二重唱、伴奏は和音と分散和音からなり6番までの歌詞が音符と同様手書きで書き込まれている。

本短大の講義の際に学生と共に使用する楽譜は、讃美歌とともに変口長調であるので、今回は変口長調の「うたとあそび」の楽譜で以下考察していくことにする。

変口長調、8分の6拍子の12小節からなるこの楽譜には前奏が書かれていない。このような場合の学生への指導では、三つの方法をとらせる。先ず最後の4小節を前奏に、次に最初の4小節を前奏に、最後は全く異なる前奏を作るところから始める。現在表現Ⅲの講義・演習において「うたとあそび」の中で学生達が最も苦手としている教材のひとつ、阿久悠作詞・小林亜星作曲の「ヤンチャリカ」を取り上げ、段階をおってそれぞれのオリジナルの伴奏楽譜作りに取りかかっているが、前奏についても先に述べたように、それぞれに工夫・創作させていくわけである。

それでは各小節について考察していくことにする。

⑨—⑫小節 (前奏)

前奏には、最後の4小節を奏して歌の導入へとつないでいく。伴奏譜が基本的に四声で作られていることを意識して、それぞれの声部を大切に奏したいものである。先ず、右足のペダルを踏みこんで弾き始めると、ペダルを踏む時の雑音が無いことは、紀要第39号の「花」や「菩提樹」でも述べている。左手のF—F—Aの跳躍が大きいのと、同じ和音の中での動きであるのでペダルは不可欠と考える。右手内声を少し控えめに、高音部のメロディーが美しく響くよう右肘・右手を心持ピアノの高音部側に、腕を楽な状態に持っていくと良い。指使いに関しては筆者の運指法で楽譜に記入している。ペダルも同様に記入した。

きよしこの夜

由木 康 作詞
グルーバー 作曲

楽譜3 「きよしこの夜」(うたとあそび)

①—④小節 (うた)

①②小節ともに右手の重音の伴奏は、心もち高音部を強めに明瞭な音で奏する方が望ましい。16分音符が鋭すぎないために、オルガンの音をイメージして、指先は平たく鍵盤を圧すタッチにすると音がなめらかになる。③④小節の右手高音部の旋律のメロディーにない半音の動きが荒くならないように細心の注意をはらうようにするとよい。いずれの小節も4・5・6拍が付点4分音符で動きが無いので3拍十分伸ばすように気をつけることと、もしくはFBD音とリズムを刻んでも良いと考える。又は、楽譜4に示すようアルペジオで演奏するのも美しい。

楽譜4 「きよしこの夜」(前奏2小節)

⑤—⑧小節

⑤⑥の「すくいのみこは」、⑦⑧の「みははのむねに」のことは途切れないようにするために是非レガートで奏したいところである。全く同じメロディーが繰り返されるわけだが、左手の伴奏譜でも明白のように⑦⑧では左手の旋律の動きが大きく高音に向かっている。つまり「ねむりたもう」の最高音へ向かってのまさに準備なのである。然るに後半の⑦⑧を全体的に強めに奏するというわけである。ペダル・運指は次の通りである。

⑨—⑫小節

この楽曲の山である⑨⑩が響きのある豊かな声で歌えるようにするためには、⑨の前で十分息つき（プレス）をさせることである。これまで同様に右手の高音部の旋律がはっきりと聞こえるような重心のバランスをとっていくことが望ましい。⑪⑫で自然に静かにおさめていくとよい。楽曲の強弱が記入されていない場合でも、ことば（歌詞）や旋律の動きに沿っていくと自然にクレシェンドやデクレシェンドができていくものである。歌詞をよく理解し、ことばを大切にすることが、丁寧なピアノの演奏や伴奏へとむすびついていくということである。

それぞれの楽曲の特色を出せる為には、正しい読譜、先ずは正確に奏する基礎ができ、その上で豊かな音色での演奏と進んでいきたいと考える。著者の学んだウィーン国立音楽大学の恩師ロベルト・ショルム教授は「Tausend Farbe」（1000種類の音色）を出せるようにと常に説いておられたが、それにはまずピアノの楽器の特性を知ることから始まる。いろいろなタッチの工夫に加え、ペダルも重要な役割を担っていくことも明白である。ペダルや音色・音質については紀要第35号で述べたので今回は省略させていただく。いずれにしても、歌い手が、子どもたちが、安心してのびのびと歌えるようなピアノ伴奏、いや演奏であることが望ましい。

5. おわりに

今回は1987年以来17年間というもの、常に心に掛けていた「きよしこの夜」を、歌唱教材として取り上げることができたことをとてもうれしく思っている。宗教をこえて広く世界中の人々に愛唱されている「きよしこの夜」、この楽曲の誕生したザルツブルグ・オーベルンドルフを本年また訪ねる機会を得たこと大変幸せであった。自身の目で確かめた中での再発見や驚き、また懐かしい思い出を再確認する貴重な機会になったことを感謝している。

歌唱指導においても、また歌手や演奏者との共演においても、ピアノ伴奏は基本的に楽曲の音楽構造の基礎をなすものである。今後も更に精進を続け、微力ではあるが、ピアノ伴奏を通して教育活動・社会活動の中で大いに貢献していきたいと考えている。

引用・参考文献

1. Dr. Max Gehmacher 著「Stille Nacht, heilige Nacht」1950年
 2. Fremdenverkehrsverband und Marktgemeinde Oberndorf 発行
「50 Jahre Gruber-Mohr – Gedächtniskapelle」1987年
 3. Michael Gundringer 著「Silent Night – Holy Night」1948年
 4. Tourismusverband 発行「Stille-Nacht-Romantik」2004年
 5. Tourismusverband Oberndorf 発行「Oberndorf bei Salzburg」2004年
 6. Stille-Nacht – und Heimatmuseum Oberndorf 発行「Oberndorf」2004年
 7. Abtsdorfer See 発行「Laufen an der Salzach」2004年
 8. 福原信夫著「そのガッセ（小路）の家にベートーベンが住んでいた」1987年
 9. 鹿児島市私立幼稚園協会編 うたとあそび2004年
 10. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅰ」鹿児島女子短期大学紀要第35号2000年
 11. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅱ」鹿児島女子短期大学紀要第36号2001年
 12. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅲ」鹿児島女子短期大学紀要第37号2002年
 13. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅳ」鹿児島女子短期大学紀要第38号2003年
 14. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅴ」鹿児島女子短期大学紀要第39号2004年
- (2004年12月2日 受理)